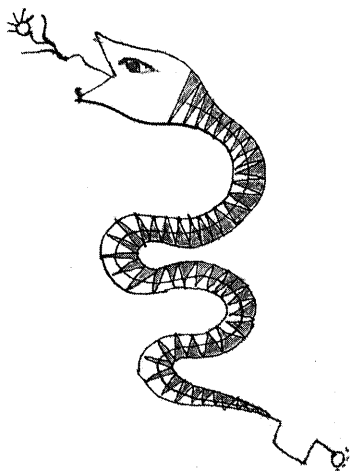


虫

松井 とし



五月の連休の後、S子が二匹の青虫を持ってきた。埼玉の祖母の家へ行ってとってきたのだという。さっそく観察箱に入れ、「自然」の本の中から「あげは」を取り出して一緒に読んだ。次々に登園して来る子どもたちも

「それどうしたの。」

「ほくも飼ったことある。」

などと興味を示し、朝のひとときテーブルのまわりはにぎやかだった。

その輪の中で、S子は眼をまん丸くして友だちの言動に見入っていた。彼女は年少児の一年間を受動的に過ごした。教師の問いかけや誘いにはおうむ返しで答え、生活態度にも緊張が目立った。まわりの友だちの様子をじっと見て、納得してから行動を起こすので、友だちも出来にくかった。

S子は毎朝キャベツを持って登園し、そのキャベツをモクモク食べて、いも虫は大きくなっていった。そしてある日、いも虫の姿が見えないと探すと、箱のふたの上に体をくくりつけ、さなぎになっていた。子どもたちは時々ようすをみて、本と見比べたり、自分たちの当番表の形を蝶に決めたりしながら、さなぎの変身を心待ちにしていた。S子も当番の日には蝶の形のバッジを胸につけ、誇らし気であった。

そしてしばらく変化がないまま、ついに六月八日の朝、箱の中で白いものが動いているのを発見、みんな息をのんで見入った。

箱のふたをあけると、真っ白なちようちよは青い空に吸い出されるように、ややたよりなげに飛び立った。

「げんきでね。」

「おかあさんに会うんだよ。」

口々に声をかける子どもたち。その中でS子の瞳が輝いていた。

S子は年長になり、友だちに巡り会い、このころは少しずつ本来の自分を表しながら自信をもって生活できるようになっていた。もんしる蝶の成長は、S子自身の飛翔のイメージと重なり合い感銘深かった。

(神奈川県立教育センター)